

日本代表 59 [24-10] 17 香港代表
[8T 8G 1PG] [2T 2G 1PG]

アジアラグビー チャンピオンシップ

積極的に仕掛け、前に出たCTB石橋拓也。
あらためて桜へ挑む日々が始まっている



アライドで進化。

若き日本代表、香港を圧倒。

文/田村一博
写真/松本かおり



スーパーラグビーと時期が重なり、国内最強メンバーでないジャパンで挑んだアジアでの戦い。当初は結果を心配され、価値を問われたチームだったが、終わってみれば圧勝続きだった。1か月で大きく成長したヤングブロッサムズの変化に気づいた人は多かった。

TOP 3	JPN	HK	KOR	BP	勝点
日 本	○38-3	○85-0	4	20	
	○59-17	○60-3			
香 港	●3-38	○34-27	2	10	
	●17-59	○41-15			
韓 国	●0-85	●27-34	2	2	
	●3-60	●15-41			

Div. I	MAS	SRI	PHI	SIN	BP	勝点
マレーシア	○42-17	●10-15	○40-20	3	11	
スリランカ	●17-42	○25-21	○33-17	1	9	
フィリピン	○15-10	●21-25	●24-28	3	7	
シンガポール	●20-40	○17-33	○28-24	0	4	

Div. II	イ	グ	ア	ム	U	A	E	ウ	ス	ベ	キ	ス	タ	ン
	25	16	18											
					65	70								
					13									
3決	GUM	23-22	UZB											

Div. II West-Central	QAT	LBN	IRI	BP	勝点
カタール	○25-19	○35-12	2	10	
レバノン	●19-25	○34-12	2	6	
イラン	●12-35	●12-34	0	0	

Div. III West	第1戦	ヨ	ル	ダ	ン	41-12	UAE	シャ	ヒー	ン
	第2戦	ヨ <td>ル</td> <td>ダ</td> <td>ン</td> <td>43-13</td> <td>サウ</td> <td>ジア</td> <td>アラ</td> <td>ビ</td>	ル	ダ	ン	43-13	サウ	ジア	アラ	ビ

Womens Top 3	第1戦	香	港	3-30	日	本
	第2戦	日	本	39-3	香	港

そんなに簡単にキャップをあげていいの。ジャパンXVとしての試合にできないか。

国内最強布陣ではない日本代表の構成に、そんなふうには言われていたのが1か月前。中竹竜二日本代表ヘッドコーチ代行は選手たちを「自分たちで本当のジャパンになれ」と鼓舞してきた。個々に芽生えた責任感、それが成長のスピードをはやめた。

若き日本代表は5月28日におこなわれたアジアラグビーチャンピオンシップの最終戦、対香港の80分も59-17と圧倒。4戦全勝でアジアの頂点に立った。

立ち上がりは鈍かった。最初の20分は香港の時間。ジャパンはスクラム、ブレイクダウンで反則し、前半13分にPGで先制を許す。19分には今大会初めてトライも許した。

しかし、桜のジャージーは徐々にペースを取り戻した。SH内田啓介主将は「0-10と苦しかったときも冷静にみんなで話し、修正できた。ブレイクダウンで手を使うことに（レフリングが）すごく厳しかったので、そこはやめよう。自分たちの最初のトライをシンプルにとれた。

あれで落ち着けた」と話した。その自分たちを取り戻したトライは前半24分。突破したCTB石橋拓也をFL金正奎がサポート。その好機をLO小瀬尚弘が仕留めた。それぞれのプレーに責任が感じられた。

抜けた石橋は、2週間前に発表された6月にカナダ・スコットランドと戦うスコッドからは名前が漏れていた。その発表に「力が足りない」と痛感したものの、桜のエンブレムを胸にする責任感でこの日は抜群だった。金は、防衛裏に出た選手を瞬時にサポートする得意の反応力を見せ、自身が次のステージに進む力があると証明した。

後半中盤から、BKは大胆にプレーし、FWはスクラムトライを奪うなど、力の差を見せつけた。中竹ヘッドコーチ代行は遅くなったチームの姿に、「短い準備期間だったが、いいチームになった。選手からたくさんものを学んだ。組織を動かす人間として、リーダー陣の言動や盛り上げるときの態度など、学ぶことが多いチームだった」と話した。

発足時に聞かされてきた疑問や心配の声も、どこかに消えた。残した結果も、いつものジャパンと比べても遜色ないものだった。